

インパールの南方の地に、また一個連隊は南海の島フィリピンで玉砕をする。歩兵第二十四連隊軍旗もレイテ島で奉焼されたのでした。

米軍再上陸のレイテ島の戦闘は、従来 of 戦闘展開を遙かに超えた壮絶な空爆と重砲射撃、重戦車の陣地蹂躪、火炎放射器による焼殺戦法など想像に絶する阿修羅の様相だった。命令とは言え同じ部隊の中で編成替えてこのような地に行った幾多の戦友の事を思えば唯々冥福をお祈り申し上げるほかありません。

インパール作戦でタベイキンの丘で手榴弾で自決した戦友……倒れた戦友が「水！ 水！」の一言を発し、わが腕の汗をなめて死んで行った。授ける力もなく気力も薄れて見返した友。このような姿は究極、人間の生きざまは己の体なのに、今もう生きることさえ判らない放心の姿でした。哀れです。

この身は臥して護国の鬼たらんとしたが奇しく

も生き永らえ、微力ながらも日本再建のため役立つ礎石とならなければ死んだ戦友の霊には申し訳ないと、余生を世のため人のために励んできました。

在天の英霊よ御照覧あれ。

## 湘桂作戦従軍記

福島県 清水 清

私の家は貧乏な農家で田七反、畑五反と養蚕で生計を立てていました。

六歳の時、父が急性肺炎で死亡しました。母は二カ月後に幼い弟一人を連れて実家に帰り間もなく病死しました。

私と妹は祖母と叔母に育てられ、私は昭和十六(一九四一)年五月兵隊検査で第一乙種合格となりました。検査時には農家と養蚕をやっていました。

昭和十七年六月五日、新潟県高田の歩兵第三百十連隊ヒミ隊に入隊。九月十日、群馬県沼田にある迫撃砲第一大隊に転属、沼田の木造二階建ての兵舎に入りました。

迫撃砲専門の部隊で、第一大隊だけで八百人位の兵隊がいました。大隊は三個中隊編成で、一個中隊は本部と第一から第三小隊で編成、武器は迫撃砲（径一〇センチ）、軽機、小銃で馬が二十四頭いました。

迫撃砲弾は長さ四〇センチ、径一〇センチ、重さ五キロ位でした。私らのあと初年兵は来ず、私は三年兵になっても初年兵と同じ事をやっています。

昭和十七年十月十日、広島から中国呉松に上陸、十一月中旬、湖南省京山県に駐屯する迫撃砲第一大隊（永田部隊）に到着しました。

ここで大隊段列（輜重）第一小隊第三班に配属。昭和十八年二月十三日から江北殲滅作戦に参

加しました。駄馬部隊で迫撃砲弾の運搬でしたが、馬の手綱を執りながらの行軍で、休憩のたびに馬の水飼いや手入ればかりで、十日間位の作戦はいつの間にか終わっていました。

昭和十八年六月中旬、一選抜の上等兵に進級、八月中旬京山で熱帯熱マラリアで入院しました。

昭和十九年四月初め、中隊長から全員集合の上、大隊段列は、

- ①第十三師団の配属となり重慶を攻略する。
- ②残留部隊は残さず全員出動する。
- ③京山には帰還しない。私物は小隊単位で集積する。との伝達がありました。

昭和十九年四月二十九日より湘桂作戦第一期に参加。大隊段列は第六十五連隊に配属となり京山を出動、常に昼間の行動でしたが、六月頃から日増しに敵機の銃爆撃を受けるようになり、昼間の行動は制約され、夜間行動になりましたが、部隊の前方では撃ち合う銃声を聞く事もありました。

敵機は夜間にもいつとなく頻繁に飛来して、中国大陸の真っ暗な夜空を薄明るくしての曳光弾まじりの機銃攻撃に、度々兵隊や馬の死傷も出ました。

馬の手綱を離しても、馬は疲れているので荷物を背負ったまま動かない。兵隊は何一つない草むらに横たわり、今死ぬかと雑草を掴みながら、敵機の去るのを待った事も幾度ありました。

敵機の攻撃が終わり、また行動があり、攻撃を聞きながら行動を続けると、道路上には以前の爆撃の跡が大きな水溜りとなった穴も数箇所ありました。戦争は毎日このようなくり返しでした。

昭和十九年八月九日湘桂作戦第二期に入る。九月中旬から敵戦闘機やB 29が飛来し、無差別な銃爆撃で第六十五連隊の第三大隊長以下多数の死傷者が出たとのことでした。

全県は広西省に属し湖南省とは異なり山岳が多い。山陰から突然発砲されましたが幸い死傷者は

出なかったのです。作戦に出てしばらくすると軍服や編上靴に穴があいても補充がない。兵隊は皆、現地人の服や木綿靴を使用し、シラミやマラリアも苦にならなくなってきました。

昭和十九年十二月末日より広西省宜山県北牙で長期警備並びに討伐を行いました。

昭和二十年五月二十八日に北牙を出発、湘桂反転作戦が始まり、この時は夜間行動で、川岸を行くと対岸から激しい銃撃を受けました。これが最後の銃撃でした。

その後も毎日敵戦闘機が銃撃を続けていました。八月十五日からピタッとその銃撃が止んだので何かおかしいと戦友同士が話し合っていました。

八月十七日も快晴の青空に爆音一つ聞こえない。不気味に静まり返った夕方、小高い丘の上に全員集合させられ、遙か日本に向かい故郷を偲びつつ遥拝をしました。その時、初めて中隊長から日本が無条件降伏した事を知らされました。

戦友達の顔はよく見えなかったのですが、無念の思いがいっぱいで皆は無言でした。その夜は眠れぬまま朝を迎えました。

次の日も朝からの快晴の中、行動していても、米国の輸送機が頭上低く飛んで行くという状況でした。

昭和二十年十月上旬、最後の待機地である江西省湖口市から四キロ離れた王家村が武装解除地と指定されました。

兵器掛が使役兵を連れて小銃等にある菊の御紋章を削り取る作業に励んでいました。

私達の分隊は小さなお寺を割り当てられました。何も無い土間なので、小高い丘に行き柴木を刈り取り、農家から藁を少し貰い、土間よりましなクッションを作り、ここで先の分からない生活が始まりました。

我々の糧秣は国府軍から支給されますが、ほんの少量で、水のようなカユ一杯だけでは体が衰弱

するので、健康な者はそれぞれ農家の手伝いに行き、晩酌付きで昼食や夕食を御馳走になりました。

ある日のこと、ある家庭から人夫の要請があり、水牛小屋の掃除やクリークの泥を水田に担ぎこむ仕事を四人で行った時のことです。日本なら部落の区長宅です。お酒を飲みながら、その家の息子である大学生が、「今、中国の住民が貴方達を『シーサン、シーサン』と呼んでいるが、敗戦前はシーサンとは先生と書く。しかし敗戦後の『シーサン』とは『西山』と書く、この意味が解かるか？」と言う。

誰も解らない。「中国では『西山』とは墓地のことを言うが気にしないでくれ、日本は十五年後は必ず復興する。その時こそ中国と日本は手を結び仲良くしなければならぬ」と言われ感無量でした。

私達は無料奉仕なので晩酌や煙草も次第にエスカレートし作戦も大成功でした。

昭和二十一年正月、私が毎日仕事に行く農家から迎えに来たので三人で行きました。家の門を入ると同時に突然爆竹の音でビックリしました。家に入ると真っ赤に染めた豚の頭を中央に据え、海の物、山の物を周りに格好良く飾り三拝九礼する。こうして酒を御馳走になりお正月も終わりました。

その後も農家に行き奉仕を続けて四月末のある日の事です。仕事も終わりお酒を御馳走になっていたら老婆が「お前、家から便りがあるか？ 東京は物凄い爆撃で家はあるのか？ 便りがあるまでこの家にいろ」とか「田畑も多くあるから養子になれ」「美しい娘を貰ってやるから」などと真剣に言われました。

また、その頃から共産軍が日本兵の募集広告を出すようになり、条件は二階級特進の上に姑娘と乗馬一頭付きとのことであった。

農民の情報はどこから入るのかとにかく早かった。日本兵が帰るといふニュースは我々兵隊より

早かった。老婆は「お前達が日本に帰るのに船の中で煮炊きせずとも食べられるポミーと飴をやるから食べながら帰れ」と、大きな布袋を三個差し出され、感謝感激の涙で「有難う、申し訳ありません」と心からお礼を申し上げました。今でも時々思い出しますが、これは人生最大のイベントでありました。

昭和二十一年六月十三日、上海を出発、リバティー第七十五号に乗船、一路祖国日本へ向かいました。船中の食事は海水で炊いた飯で、塩辛い味がしたことが記憶に残っています。

懐かしい祖国博多に入港しましたが、検疫のため三日間船内で待機させられ、やきもきしました。六月二十日、復員式もそこそこに我が家へ向かいました。

復員時における兵力九百十九人、内残留五人、入院六十二人、生死不明十五人（本土兵備六人、逃亡九人）、帰還人員八百三十七人となっていました。

す（厚生省調べ）。

私は徴兵検査の前に結婚してしまいましたので、帰還したら男の子が生まれていて、立って歩いていました。突然帰ったのでびっくりするやら、とても喜んでくれました。

留守宅では祖父と妻と子供の三人に、他に奉公人（女子）の計四人が待っていてくれました。早速農業に励んでいるうちに子供のマッチの火遊びで家が火事になり焼失してしまいました。大変な事になりましたが、死んだ積りで必死に稼いで、一カ年後に家を建て直しました。

その頃は戦後のインフレで、借金を返すのにはまたとない楽な時期で助かりました。インフレで米の値段が高くなり、収入が増え、借金返済は逆に楽になったのです。

子供も男二人女一人の五人家族で、田三町、畑五反の米作農家ですが、長男が農業の傍ら弱電工場を経営しているので助かっています。長男も子

供の頃の火事を出した事に責任を感じてくれているのだろうと思っています。

過去を振り返ってみて兵隊の時代に一番苦勞と  
いうか切なかつた事と言え、私が一選抜の上等  
兵になって間もなく熱帯熱マラリアになり、四〇  
度の熱が出たので班長に「清水上等兵、熱発のため診察をお願いします」と頼んだところ、班長が  
「清水！ 貴様一ペンでも俺の所へ食事を運んだ  
ことがあるか！ 洗濯をした事があるか！」とビ  
ンタを喰わされました。勿論診察の申請は却下さ  
れました。余りの口惜しさに便所に駆け込んで泣  
きました。

実は同年兵の一人が、班長への点数を上げよう  
として、班長の世話を独占していたので、他の兵  
隊は「班長の世話はいつにまかせておけ」とい  
う状態になっていたのです。

私の診察はそういうことで班長には断わられま  
したが、衛生兵（六年兵）が申請してくれたの

で、そのお陰で診察を受けられ、入院し、大事に至らず治りました。班長は「えこひいき」が激しいので評判は悪く皆から敬遠されていました。

## 中支・南支戦線

### 駆け歩き記

福島県 鈴木 利平

私は、大正五（一九一六）年三月一日、福島県喜多方市豊川町米室字能力堰下で生まれ、本年、八十七歳となりました。

私の軍歴は、昭和十九（一九四四）年三月十五日、補充兵として教育召集で会津若松の歩兵連隊東部第二十四部隊へ入隊しました。二十八歳でした。

私が入隊した当時の私の家庭状況は

父・母 健在 農業（田八反・畑二反）

長男（私） 〃 徴用 川崎市の日本鋼管勤務

二男 〃 仙台の陸軍へ在隊していた

三男 〃 海軍へ入隊していた

妹五人 〃

上の三人は結婚して他家へ縁づいていた。

下の二人は未だ学生で父母と同居と言ったものでした。

さて、若松の歩兵部隊へ入隊した私が、最初に苦しめられたのは、対抗ビンタでした。軍隊へ入るまでの私は、およそ犬畜生でもない人間がホウベタを無抵抗で連打されるなんて言う事は想像もしていません。しかも新兵同士、相手に多少の遠慮をして力を加減していると、横で監視している古年兵が「メガネを外せ、歯をくいしばれ、脚を肩幅に開いてふんばれ」と要求し、それこそ力いっぱいになぐりつける。新兵はそれを見習って叱られないようにする。

こんな野蛮な制裁が横行するなんて思まわしい限りでありました。しかも手で殴るより帯剣のべ